

Title	国家的物流としての漕運：明代北京の現物米財政と畿輔経済
Author(s)	田口, 宏二郎
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/41336">https://hdl.handle.net/11094/41336</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	田口宏二朗
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第14319号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科史学専攻
学位論文名	国家的物流としての漕運 —明代北京の現物米財政と畿輔経済—
論文審査委員	(主査) 教授 濱島 敦俊  (副査) 教授 片山 剛 教授 平 雅行 助教授 桃木 至朗

#### 論文内容の要旨

本論文は、序・本文5章・補章・結から成る。近世以降の中国では、政治・軍事的中心は華北に位置し、一方、経済的中心は江南に在った。故に、南方で徴収した財貨（特に米穀）の北方への運送＝漕運が、王朝にとり大きな意味を有していた。本論文は、漕運を単なる財政行為としてではなく、物資の流通・移動という視角から捉え直し、首都北京および周辺地域＝畿輔に及ぼす経済効果を考察したものである。序において研究史の整理、および分析視角の設定が為された後、論は以下の如く展開される。

運送される現物米＝漕糧の総額は、永樂以降、規定額400万石に固定されたが、16世紀以降、銀への切り替えが行われ、現物は300万石以下に減少した。その用途は、行政官への給養、或いは直接民需に充てられることは無く、全て首都および周辺の駐屯軍への現物給与に限定されていた。大運河で運ばれた漕米は、首都東方の通州倉、及び北京城内の京倉に蓄積されたが、その所在・規模・構図・内部構成を丹念に検討し、最大2000万石の貯蔵能力を有していたことが判明した。さらに軍士への毎月の糧食（月糧）支給に当たっては、直接支給を原則に、詳細な文書システムが存在していた。歴大な米穀が蓄積される通州の意義は、あくまで国家の物流拠点であり、民間的な要素は希薄である。

月糧は、軍人の階級に因る俸給の差等に関わらず、永樂22年（1424）以後、各人、糙粳（粳の玄米）1石に固定された。これは3～5名程度の世帯の一月の消費量と算定される。つまり、この月糧は、自家消費分に相当し、市場における交換を前提としたもの（使用貨幣）とは想定されていないのである。漕米は、15世紀後半のごく限られた一時期に、平糶（備蓄米放出）が実施された例を除いて、飢饉などでも民間に放出されたことはなかった。16世紀後半、曲折を経つつ、二ヶ月分の月糧が銀支給に切り替えられる。此の段階に到ると、軍士による餘米の売却、さらには、江南産の糙粳米＝優等財を売却して、粟など華北畑地産の雑穀＝劣等財を購入する現象も指摘されるようになる。そこには北京における民間に自生的な穀物市場の形成が前提として想定される。

形成の背景には、元末明初に極度に荒廃した畿輔地域における人口の増加、再開発の進展が在ったと推定される。ただ明末では、大運河に沿う河間府には米穀移出の記事が見出されるが、他地域は、人口・耕地面積の激増が統計から明確に看取されるにもかかわらず、米穀の搬出を語る記事が見出せない。いまだ首都周辺の畿輔地域は安定した分業圏を形成し得ていなかったと考えられる。（補章）16世紀後半、畿輔地域で試みられた水田開発は挫折した。従来は政治史・思想史研究者は特権層（勳戚・宦官）が正義派官僚の事業を妨害したと語ってきた。しかし、政治・思想

的立場は共有する官僚からの、自然・技術条件に立脚した批判が、投資効果の少ないこの事業を中止せしめたのであった。

### 論文審査の結果の要旨

大運河は多くの関心を引きつけた項目であり、漕運も関連してそれなりの研究が行われてきた。しかし、制度史的考察を主とする従来の研究は、その全国の物流にしめる位置などについては、史料状況の故もあって、取り上げられてこなかった。本論文は、微細な史料を博搜し、経済学的素養を基盤に鋭い分析を加え、豊かな歴史事象を描き出した。

既に前節で述べた本論文の独創的知見は、制度史的側面に限っても、多くを新たに解明している。さらには、全国的な米穀の生産・流通・分配、また日本・新大陸からの大量の流入に伴う銀経済の進展という経済史の問題に直接に関連させつつ、漕運を新たな視野から分析した点は、中国近世経済史研究に大きな寄与をなすものと評価される。

もちろん、たとえば、軍士の家丁化という軍制史の定説と如何に関連するか、米穀売却・雑穀購入に示される嗜好の南北の差違、ないし変化は何を意味するか、畿輔各地の作付体系や穀物需給状況など、本論文で未だ尽くされぬ問題が無い訳ではない。かつ細かな事実・史料の理解に、全く問題無しとはしない。

しかし、本論文全体の重厚で骨太な立論を損なうが如き誤りは皆無である。残された問題も、本論文を基礎とする今後の研究に期待される課題と言うべきであろう。

よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容を有するものと認定する。